epoch
エポック No137 号
千代田区生涯学習推進委員会議だより
令和7年(2025年)12 月発行

第 15 期第7回生涯学習推進委員会議　概要報告

令和7年9月 25 日(木)に開催された千代田区生涯学習推進委員会議は「千代田区における住民交流の促進に資する生涯学習の役割」をテーマに、特に高齢者と若年者の交流に焦点を当てて議論が進められた。

委員による活動報告や現場調査を通じて、多世代交流の必要性が明らかとなり、提言書の骨子として①社会人のリカレント教育、②デジタル社会への対応、③共生社会の実現、④世代間交流の促進、⑤社会教育人材の育成支援の 5 点が整理された。若者や外国人を巻き込んだイベント企画、町会と企業の連携、障害者・外国籍住民への支援体制強化などが課題として挙げられた。

次回は提言原案をもとに意見を集約し、最終的に区長へ提出予定である。

1. これまでの流れ

第 1 回生涯学習推進委員会議は令和 6 年 6 月に開催され、それ以降、計 6 回にわたって議論が進められてきた。第 2 回では、前田会長による国の動向に関するレクチャーがあり、千代田区の現状についても情報が提供された。第 3 回では、テーマの絞り込みが行われ、委員の活動内容についてはアンケートを通じて紹介されている。

令和 7 年に入ってからの第 4 回では、区が新たに立ち上げた「ちよだイズム倶楽部」の概要が説明され、加えて社会福祉協議会からは多世代交流に関する取り組みが紹介された。第 5 回では、これまでに寄せられた意見を整理し、今後の議論の方向性が確認された。

第 6 回(7 月末)では、「ちよだイズム倶楽部」参加者へのアンケート結果が報告され、錦町で開催された歓迎会における現場インタビューの内容も共有された。これまでの議論を踏まえ、委員からの提案や意見をもとに、提言の骨子をまとめた資料が提示されている。

2. 今後の予定

第 7 回となる今回で報告書の骨子にあたるアウトラインが提示される。第 8 回が 12 月頃に開催される見通しで、翌年 3 月頃に実施される第9回で完成した提言書を区長に提出する予定となっている。

3.提言書の内容について説明と意見交換

提言書「はじめに」

生涯学習推進委員会議は 2024 年 6 月に始まり、委員の活動報告を踏まえながら、今期の協議課題として「千代田区における住民交流の促進に資する生涯学習の役割」が設定された。高齢者（長期居住者）と若年者（短期居住者）に焦点を当てた議論が進められており、背景には中教審分科会での議論や、2027 年に予定される社会教育法改正の動きがある。千代田区では若年層の転入・転出が多く、地域を支える高齢者の高齢化も進行している。こうした状況を踏まえ、若者の定住促進と世代間交流の重要性が意識されている。

提言書では、①社会人のリカレント教育、②デジタル社会への対応、③共生社会と社会的包摂、④世代間交流とアウトリーチ活動の 4 つの柱を掲げ、地域コミュニティの活性化と社会関係資本の再構築を促すことが期待されている。

Ⅰ.社会人のリカレント教育への取り組み

（説明）

千代田区では、社会人の学び直し（リカレント教育）を重要課題として位置づけ、「千代田キャンパスコンソーシアム」などを通じて大学と連携した教育活動を展開している。また、「ちよだ生涯学習カレッジ」や「ちよだイズム倶楽部」も、継続的に関連講座を提供している。

若者の意見を反映する場として「錦町大歓迎会」があり、半構造化インタビューによる質的調査を通じて、社会人教育に必要な要素が明らかになった。

調査結果からは、社会学を学ぶ機会や専門性の高い講座、企業理解の場などが求められており、今後の施策検討に活用すべき示唆が得られている。

Ⅱ.デジタル社会への対応

（説明）

千代田区では、第 13 期の提言においても触れられているように、地域ベースでのデジタル支援活動が進められている。具体的には、町会等による高齢者・障害者向けのスマホ教室や LINE 講座、パソコン教室の開催、大学生によるボランティア支援などが行われており、特にコロナ禍において若者のデジタルスキルを活用した「スキルシェアリング」が機能してきた。

（意見交換）

- 町会ではネットを使った情報提供が行われており、LINE グループなどで一斉送信される仕組みがある。
- 若年層や 60 代の運営者は問題なく利用しているが、80～90 代の高齢者には紙媒体が必要
- ウェブでパスワードを使って町会員が情報にアクセスする形式がある。
- スマホのトップ画面に情報が表示されるなど、利便性が高まっている。
- スマホやインターネットの使い方について、年齢に応じたボランティア指導が必要。

Ⅲ.共生社会の実現と社会的包摂

（説明）

千代田区では在留外国人の増加に伴い、共生社会の実現が重要な課題となっている。他自治体にある国際交流協会が千代田区には未設置であり、今後の創設の必要性が示された。また、「同化」ではなく「共生」が重要であり、母語の維持や民主主義の理解支援が不可欠である。

町会は地域の担い手育成や民主主義の学びの場として機能する可能性があり、ちよカレなどの生涯学習の場で多文化教育プログラムを展開することも提案された。障害者支援については、合理的配慮の徹底が求められ、新九段生涯学習館（仮称）などでの対応が必要とされた。

すでに外国籍住民への支援として日本語ボランティア団体の活動や外国語パンフレットの配布が行われているが、区としての直接的な受け入れ体制は未整備である。

（意見交換）

・「町会への外国人入会促進」は斬新な提案で防災面でも有効である。ただし、言語や文化の違い、受け入れ側の理解不足など課題も多い。

・ 和太鼓サークルなど、外国人との地域交流の事例もあるが、言語能力や関心の有無が障壁になる。

・ 自動翻訳機などの技術活用も可能だが、実際の交流には意識の共有が必要。

・ 外国籍の子どもが増加しており、日本語支援や通訳の配置が行われている。

・ 学習意欲や家庭の文化的方針によって支援の効果が左右される。

・ 専門部署の設置（例：「多文化共生課」など）を求める声あり。他自治体では既に設置されている例もあり、千代田区でも検討すべきでは。

Ⅳ.世代間交流の促進とアウトリーチ活動

（説明）

千代田区では、長期居住者と短期居住者（特に若者や在勤者）との関係性を深めることが重要な課題とされている。若者の参加を促すには、トレンドを取り入れた学習講座や、外国人を巻き込んだイベントなど、関心を引く企画が求められている。地域の柔軟な町会運営のもと、企業に勤める若者との接点を増やす取り組みも進められている。

町会は、親睦機能に加えて、防災・防犯を担う「共同防衛機能」を持ち、災害時の対応力を高める役割を果たしている。地域行事やまち歩きイベントなどを通じて、世代間交流の機会を創出することが期待されている。また、町会に在住外国人や在勤者が参加することで、地域のつながりが強まり、緊急時の備えにもつながる。

町会の担い手として、長期居住者の役割を再評価し、企業との連携を通じた人材発掘の仕組みづくりも重要視されている。町会を民主主義の担い手として位置づけ、地域の多様な人々が関わることで、より開かれた地域社会の形成が期待されている。

（意見交換）

・ 町会によって防災備蓄の状況は異なり、補助金（年間最大 10 万円）を活用して非常食や発電機などを備えている。

・ 小規模町会では防災倉庫の確保が難しく、複数町会で共同利用している例もある。
・ 地域によっては大企業が町会に加入し、倉庫提供やイベント協力など積極的に関与している一方で、企業が町会に関心を持たない地域もあり、町会活動への参加促進が課題。
・ 住民が少ない地域（例：丸の内）では企業主体の町会運営が行われている。
・ 町会長会議にも企業代表が参加しており、情報共有が進んでいる。
・ 災害時の対応を考えると、在勤者や外国籍住民の町会参加は有効である。阪神淡路大震災の事例では、外国籍住民が炊き出しや多言語放送で地域に貢献した。
・ 在勤外国籍住民への支援は企業任せになっている現状があり、区としての対応には限界があるので企業が主体的に支援体制を整えることが望ましい。

Ⅴ.社会教育人材の育成支援と活躍の機会拡充

（説明）

千代田区では、社会教育人材の育成が重要な課題とされており、現在は社会教育主事から社会教育士への制度移行期にある。新制度では実習が義務化されており、区としては大学からの要請に応じて施設提供などの対応が求められる可能性がある。

一方で、社会教育主事の資格を持つ人材は区内にも多く存在するが、企業に就職するケースが多く、地域で活用されていない状況がある。こうした人材を生涯学習や社会教育の場で活かす仕組みづくりが求められている。

また、町会や地域行事の後継者育成も社会教育人材の育成の一環とされ、在住者・在勤者を含めた担い手づくりが課題となっている。子ども会活動も将来の地域担い手を育てる場として重要であり、千代田区では地区運動会などを通じてその伝統が維持されている。

（意見交換）

・ 子ども会は町会が中心となって運営されており、コミュニティスクールとは別の枠組みでしっかり活動しているが、地域の担い手育成の観点から、子ども会活動の継続と強化が重要である。
・ 社会教育コーディネーターや生涯学習支援コーディネーターは現在十分に機能していない。
・ 地域独自の資格制度を設け、ちよカレなどで育成・活用する仕組みが必要。
・ 生涯学習という言葉が広がる中で、教育的な意義が曖昧になってきているので、社会教育の再評価が必要であり、文科省もその方向に舵を切りつつあるとの見方がある。
・ かつては区民合唱団やオーケストラなどに教育的な熱意が込められていたが、現在はサークル活動的な側面が強まり、目的意識が薄れているため、地域文化の担い手としての意識を再び育てる必要がある。
・ 教員の負担軽減や働き方改革の観点から、社会教育人材による部活動支援などの側面的な協力が求められている。
・ 教育現場では、専門外の部活動顧問を任されるなどの課題があり、外部人材の活用が有効とされる。

リレー随筆

「きっかけ」

塩谷　貴則

ご自身の会社務め等の社会活動と、生涯学習に関わる活動にはどのような違いがあるか。

前者のいわゆる仕事については半分娯楽でやっているような余裕のある御方もたまにおられるが、例えば行政機関の窓口に立つ方がその業務を無給の趣味でやられては困るし、どのような業種・業務であれその道のプロフェッショナルである事が求められ、それらがなければ困る人が存在することこそ社会活動であって欲しいと考えている。

一方で生涯学習とはどのようなものなのか考えてみると、始めるきっかけはほんの少しの「好奇心」であり、続けていく道中でも成果や評価を求められるものではない。例えば私が係わる町会活動や神田祭及びボーイスカウトの運営などで優先されるものは、目標の達成よりも個人がそこにかける情熱やそこから得られる満足感だと認識している。

ここで一つ、私が神田祭に係わる事になった発端と、その運営から得られる満足感は何かを考えてみたい。

私が子供の頃、自分の所属する町会ではお神輿はあっても担ぎ手はいない、いわゆる飾るだけの神輿であった。他の町会から「なぜお神輿があるのに担がないのか？」との純粋（？）な疑問に、非常に残念な思いをすることが 2 年に 1 回繰り返された。

これからの世代にはそんな残念な思いはして欲しくない。

その思いから町会の神輿渡御を復活させたが、意外にも仲間は増え続け 10 人程度から始めた活動も、今や運営にかかわる人だけでも 70 人を超える大所帯となってきている。

もちろんそこに情熱はあった。しかし、本当の原動力はほんの少しのきっかけと皆の「好奇心」の矛先だったように思う。

私自身はお神輿を担ぐこと自体は重たいだけなのであまり興味はない。これからも紆余曲折はあるだろうが、当たり前のように神田祭には町内神輿を出して盛り上がるための準備をすることが私の感じる満足感である。

同じ活動の中でも、そこに求めるもの得ようとするものは人それぞれである。「こうである」という固定した気持ちは持たずに、仲間と一緒に活動を続けることそのものが私の考える生涯学習だとお伝えして締めくくりたい。ご一読いただき、ありがとうございました。

私の生涯学習

山部　達弘

　生涯学習という言葉を初めて知ったのは、令和２年にちよだ生涯学習カレッジ（ちよカレ）に応募した時でした。
　当時は「生涯学習」をしたい。というより、千代田区に来てまだ３年目だったので、自分の住んでいる地域のことを知りたい。というのが動機でした。
そこで千代田区に住む多世代の友人がたくさん出来たことで、私の生涯学習が始まりました。

　そのちよカレで、千代田区の廃校になった旧小学校校歌を調べている人の発表を聞いて面白い企画だなと感心していたら、まち歩きの企画としてまとめる人が現れ千代田区立旧小学校校歌保存研究会が立ち上がり、「その企画なら動画の撮影と編集しますよ」と自然に言葉が出てしまい私も動画担当として加わり、「廃校となった千代田区の旧小学校の校歌を巡るまち歩き　ブラヒロシ」を YouTube に投稿しています。

　そこでは毎回、新しい方との出会いがあり、いろんな人の思いに触れる機会をいただき、そして自分なりに地域を学んでいます。
この出会いがなければ千代田区生涯学習推進委員にもなってなかったです。

　人と出会い、心が動くことに参加し、自分の人生を豊かにすることが、私にとって生涯学習だと思います。

【編集／発行】千代田区　地域振興部　生涯学習・スポーツ課　〒102-8688　千代田区九段南 1-2-1
TEL：03-5211-3632　／　FAX：03-3264-1466　／　Mail：shogaigakushuu@city.chiyoda.lg.jp